

九州における近代整形外科の祖、 住田正雄（一八七八—一九四六）の生涯

小林 晶

はじめに

平成十一年（一九九九）は九州大学医学部（当時は京都帝国大学福岡医科大学）に明治四十二年（一九〇九）五月二十四日勅令第四百四十二号をもって、整形外科学講座が開設されて以来九十周年を迎える。すでに、東京帝国大学と京都帝国大学には明治三十九年に講座が開設されていたので、わが国では三番目のことになる。

初代教授には住田正雄（以下敬称略）が任命された。残念なことに彼自身の詳細については、記録に残ることが少なく、語られることもほとんどない。第二代神中正一教授、第三代天児民和教授の姿があまりにも大きく、その蔭に埋没している印象さえある。しかし、わが国における近代整形外科の基礎を創り、九大整形外科をそのメッカにした創始者として、永遠にこの名は記銘されなければならない。この機会に是非詳細に記録しておきたいと考え、その生涯について述べたい。

九大赴任までの経歴

住田は明治十一年(一八七八)三月二十七日兵庫県津名郡江井村垂井(現一宮町江井)に(図1)、父正賢、母きぬの四男として生まれた。住田家は代々回船問屋を営み、財をなした。家長は金作の名を冠して名乗り、父正賢は八代目金作である(図2)。母は別所家の出自であり、遠くは天正年間播磨三木城の城主であった、別所長治(永禄元年、一五五八?—天正八年、一五八〇)に遡れる¹⁾。因に住田家と別所家の菩提寺は同じ江井の法華寺である(図3)。また今回判明したことであるが、後年東大整形外科の第三代教授となった、三木威勇治の祖先を辿ると、住田家と関係をもっている(図4)。すなわち、別所長治の弟治定は三木家の養子となり、黒田如水の妹を娶った。この末裔医師三木滝治が福岡県遠賀郡岡垣町手野に開業し、威勇治が生まれる²⁾。誠に不思議な縁といわざるをえない。

住田正雄の次々弟(六男)正昭が大正六年から一年間、甥別所正恭も大正九年から六年間整形外科医として、九大時代の住田整形外科教室に入局している。

住田は明治二十九年大阪尋常中学校(現北野高校)、同三十一年第五高等学校を卒業後、東京帝国大学医科大学に入学、明治三十五年(一九〇二)に卒業している。医籍登録番号は一六九〇三号である。直ちに大学院に進学、外科学一般を佐藤三吉教授のもとで学んだ。助手になったのは同三十七年五月である。この一時期、後に東大整形外科初代教授となる田代義徳に实际的な指導を受けている。同三十九年八月十七日京都帝国大学福岡医科大学助教教授に任命されて、福岡に赴任することになる。

東大時代の論文には次のようなものがある。

最初の論文は、

「稀有ナル脊椎破裂症ノ一例、神経学雑誌、三(五)、一八五—二〇九、明治三十七年」

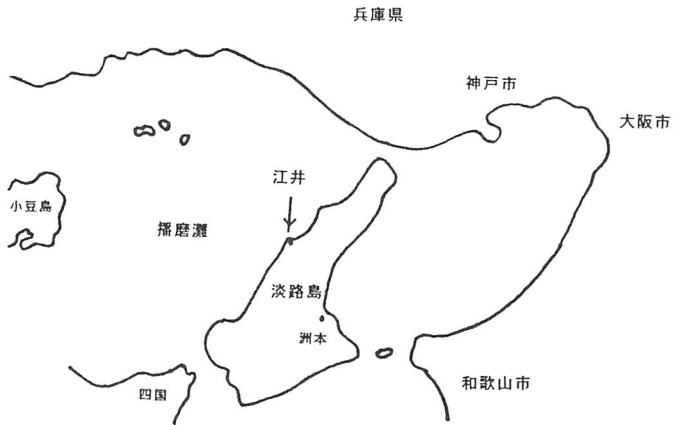


図1 住田正雄の生地、兵庫県津名郡一宮町江井。西の江井岬の丘（菩提寺の法華寺がある）よりの眺望。入り江は播磨灘に面している

- である。これは第四―五胸椎間にみられた髄膜腫を、クロロフォルムによる全身麻酔下に全摘し後遺症なく治癒できた報告である。
- その他の論文では、
- 一、乳腺結核ニ就テ、医学中央雑誌、三(二)、四―十五、明治三十八年
 - 二、肩胛骨骨髓炎及び抽出後ノ再生セシニ例ニ就テ、同前誌、四(二)、九―一二、明治三十九年
 - 三、転移性甲状腺腫ニ就テ、同前誌、二二―三七、同年
 - 四、多発性軟性纖維腫ニ就テ、医事新聞、七〇八号、五九三―五九四、明治三十九年
- などがある。

である。これは第四―五胸椎間にみられた髄膜腫を、クロロフォルムによる全身麻酔下に全摘し後遺症なく治癒できた報告である。

住田家系図

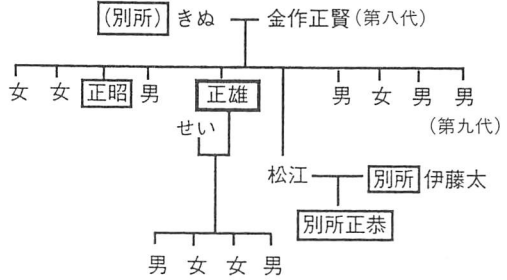


図2 住田家の家系。別所家と連なる

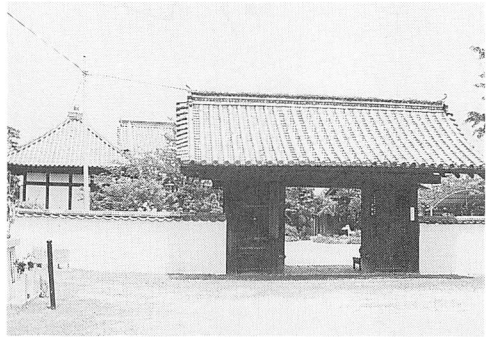


図3 真言宗平見山法華山門

別所家と三木家との系譜

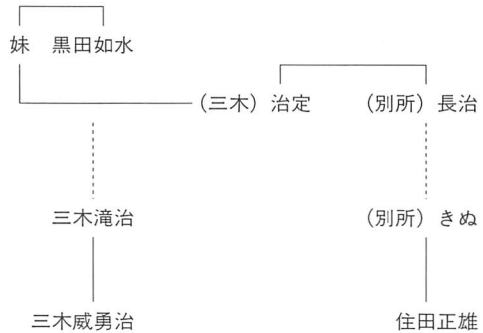


図4 住田家、別所家、三木家の関係

九大に赴任後、東大時代の業績を発表したものに、
 「炎症性原地二発生スル四肢ノ原発性癌腫ニ就イテ(其発生ニ関スル知識補遺)、日外会誌、六、一一四三、明治三十九年」
 がある。

これらの研究課題をみると、外科関係よりも整形外科関係のものがやや多い。

九大時代

京都帝大福岡医科大学には前述のように、助教として赴任し、外科学第二講座の分担を命じられた。

これは次のような事情による。福岡県立病院から発展して、明治三十六年(一九〇三)三月二十四日京都帝国大学福岡医科大学が設置され、一つの外科学講座が当初より存在した。この初代教授は福岡県立病院院長兼外科部長の大森治豊であった。明治三十七年五月外科学講座は第一と第二に分離し、第二講座の担任として三宅速教授が新任された。同十九年五月大森教授の事情で、三宅教授が第一講座を担当することになり、第二講座担当が空席になった。第二講座担当の教授として、中山森彦が同四十年九月命じられるまで、住田が分担したわけである。

三宅速は整形外科講座が東大、京大にすでに存在し、九大にも逸早く開設を熱望し、担当者の選定を東大外科の佐藤三吉、近藤繁次両教授に打診していたという。住田は将来の整形外科学担当予定者として赴任したのである。

住田は明治四十一年九月、文部省より約三年間整形外科学研究のため、ドイツに留学を命じられ出発した。

彼は同四十五年六月帰朝するが、滞独中の同四十二年(一九〇九)五月二十四日にすでに整形外科講座は開設され、三宅、中山両教授が分担していた。

ドイツでは最初にGöttingenのKaufmann教授のもとで、人体奇形学、骨の病理学を学び、GreifswaldではBaum教授の手術を精力的に見学し、FrankfurtではDitzauer教授からX線診断学を、さらに当時先天性股関節脱臼の徒手整復

と固定法を考案し、一世を風靡していたWienのLorenz教授のもとでつづき、この方法をみている。当時この脱臼はわが国では稀で症例報告として発表されていたが、住田を含めて整形外科に関心のあるわが国からの留学生は、Lorenzの所へ見学に訪れていた。

しかし、後年のライフワークとなった関節授動術の基礎実験を、LeipzigのPayr教授の下で約二年間行ったのが最も大きな収穫であった。

昭和十年Leipzigに留学中であつた天児民和は、当時まだ現職であつた、Payr教授を訪問したとき、臨床講義に誘われた。Payrは列席者に向かつて「ここに紹介する天児は、二十五年前私のところで研究に没頭した住田と同じ教室の出身者である。住田の研究態度は真摯で、その成果も後世に残る立派なものであつた」と紹介され、これほど暗れがましく感激したことはなかつたと述懐している。⁽⁵⁾

ドイツでの研究成果は次々とドイツの学術雑誌に発表された。それらには以下のような論文がある。

Beiträge zur Lehre von der Chondrodystrophia foetalis (Kaufmann) und Osteogenesis imperfecta (Vrolik), mit besonderer Berücksichtigung der anatomischen und klinischen Differentialdiagnose, Deutsch Z Chir, 107; 1-110, 1910

百ページを超える論文である。胎児標本を基礎にした研究で、従来軟骨形成不全症と骨形成不全症が胎児性くる病(fötale Rachitis)の名のもとに混同されていたのを、はっきりと別の疾患であると述べたものである。

Zur Frage der Eisenreaktion kalkhaltiger Gewebe, insbesondere des Knochens, Virchow Arch patho Anat Physiol Klin Med, 200; 220-258, 1910

骨内における鉄はカルシウムと同様支柱や弾性を与える機能を持ち、内軟骨骨化の場所に多く見られる。そしてカルシウム沈着の前に出現する。したがって、成人や死体などでは小児より少ないことを報告している。

Zur Lehre von den sogenannten Freundtschen primären Thoraxanomalien, *Deutsch Z Chir*, 113: 49-187, 1911

これも百ページを越す大著である。それまで肺結核、肺気腫などは胸廓異常に起因する疾患だといわれていた。とくに Freund は肋軟骨と骨の境界部に石灰化異常とそれに成長障害が加わると、弾力性がなくなり、これらの疾患になり易いと考えた。そして第一肋骨の切除を行っていた。しかし、住田は組織学のおよび肉眼的に、上記の境界部の変化は加齢現象としてみられるものであり、病的なものとはむしろ肺側の問題であると結論した。

Über die angebliche Bedeutung von Schilddrüsenveränderungen bei Chondrodystrophia foetalis und Osteogenesis imperfecta, *Jahrbuch Kinderheilk*, 23: 50-84, 1911

Virchow は骨形成不全症と軟骨形成不全症は新生児クレチン病と考えていた。前述の論文でみたように、この両疾患は全く別の独立したものと Kaufmann, Vrolik は結論した。クレチン病を除外する意味もあって、甲状腺の検索を行った。両疾患各三例と正常死体標本の甲状腺を組織学的に調べた結果、やはり何ら特別な差異はなく、甲状腺と両形成不全症との間には関係がないと結論した。

以上四篇はいずれも Göttingen の Kaufmann 教授のもとでの研究である。これらの研究は帰国してからもわが国で追試され、数篇の論文が新たに書かれている。

しかし、住田が最も心血を注いだのは関節授動術についてであった。当時わが国では化膿や淋病による関節炎後の強直や拘縮がかなりの頻度であり、良肢位での不動性であればこれが無痛性と支持性をもつての最良の治療結果であった。欧米でもこれらの不動関節に可動性を与えるのは、関節外科の大きな夢のある命題であった。

住田が師事した Erwin Payr (1871-1946) もドイツにおける先駆者の一人であった。単なる関節端切除では再癒合が生ずることはすでに知られていて、切除端に中間挿入物を入れる必要があった。Payr は骨膜を使用して失敗した。そこでアメリカの J. B. Murphy (1857-1916) がすでに試みていた有茎自家筋膜挿入にヒントをえて、成犬を用いて実験を開

始した。

方法は膝外側の脂肪組織を付けた有茎筋膜片で関節端を被覆した。その結果関節端には小さな滑液包様の空隙が多数発生したのである。後にこの小空隙が大きな関節腔を形成する。この発生に有効であったのは関節運動による引っ張り、充血などの機械的刺激であった。このようにして関節可動性がえられたのであって、小さな滑液包様の発生は実に住田によって最初に見い出された知見であった。これは下記の独文によっていち早く発表された。

Experimentelle Beiträge zur operativen Mobilisierung ankylosierter Gelenke — Eine klinische und histologische Studie über gestielte Weichtheillappeneinlagerung in experimentell verödete Gelenke, Arch klin Chir, 99; 75-815, 1912

明治四十五年（一九一二年）七月十七日付で、住田は九州帝国大学医科大学教授（整形外科学講座担当）に任命された⁽⁶⁾。

満三十四歳の若さであった（図5）。

整形外科学教授

住田正雄



図5 住田正雄（大正二年九大医学部卒業生アルバムより）明治末年の撮影で30歳代の後半と考えられる。横は署名

整形外科の外来診療は大正二年（一九一三年）一月十五日より開始された。しかし、教室とは名ばかりで、最初は旧病棟の二室しかなく、医局員も三名に過ぎなかった⁽⁷⁾。これはどの教室、講座でも草創期に味わる苦勞と悲哀であって、取り立てて述べることもない（図6）。しかし、入院病棟はなく総長の正式許可のもとに、市内の私立三病院に患者を収容し治療を行うことになった。大学内の病床は大正三年四月より三十床が割り当てられ、大正五年九月に五十五床となるまでこの臨時の措置は公的に継続した。大正二年度の外来新患者は一、〇六七名、再来数七、二一三名となり、この病床数では入院治療を要する患者の需要を満たすこ



図6 大正初期の九大整形外科職員。前列の医局員は左から三隅、溝口、住田、内藤、藤木の各氏

とは不可能であった。このことが後に住田の将来をゆるがす失脚の遠因となるのである。

九大時代の業績

住田は早くも大正三年(一九一四)の第十三回日本外科学会総会で、宿題報告「関節結核」を担当した。この中で彼は次のような治療方針を勧めている。

すなわち、一般的に年少者に対してはとくに著明な変化があるもの以外は、保存的治療を試み、効果がなければ時機を失することなく手術的治療に移行すべきである。成人では軽度なものは保存的に、そのほかでは手術的治療のほかはない。手術では適応を厳重に考慮して、単なる定型的切除ではなく非定型的手術(滑膜切除とのみあるいは鋭匙による病巣切除)がよい。

これは後に十年間の合計一、一一四例の報告でまとめられている。

「浅田為義、伊藤久治、関節結核ノ療法ニ就テ、我が教室十年間ニ於ケル其治療成績、九州帝国大学医学部整形外科教室開講十周年記念論文集、五九九一六八九、日新

医学社、大正十三年」

股関節単独については、

「藤木広、股関節結核ノ成因ニ関スル知識ノ追加、特ニ種々ノ年齢ニ於ケル股関節体各部ノ解剖学的相互關係ニ就テ、同上論文集、六九一―七八二」

の膨大な基礎を含めた研究がある。

また、第二十六回総会（大正十四年）では「脊椎カリエス」を宿題報告した。これは八年間の八、六五三例という驚くべき例数の診断、治療について述べた本邦初の組織的な総説である。この詳細は、

「内藤三郎、別所正恭、大正二年一月ヨリ大正十年一月ニ至ル滿八年間ニ我ガ九州帝国大学整形外科教室ニ来レル脊椎カリエス患者八、六四一例の統計的觀察、同上論文集、七一―五一」

に記述されている。

滞独時代からの関節授動術の研究は、その後も精力的にすすめ、日本外科学会誌を中心にした発表が相次いだ。これを主題にした論文は十七篇を数えるが、集大成としては、

「強直関節手術的治療法論、同上集、七八三―九三七」

がある。要旨は三百例の自験例から中間挿入膜としては遊離大腿筋膜弁が最良であること、手技の巧拙はもちろん、弁中に起こる滑液包様の造成が成績を左右することなどを結論としている。

そのほかの研究としては、Kaufmann教室での研究を引き継いだ先天性骨系統疾患についてのものがある。「四肢ノ奇形ニ就テ及其分類法」、「肢骨奇形ニ於ケル興味アル成形手術」「侏儒ノ種類ニ就テ」、「オステオゲネーシス・インパーフェクタノ歯牙ノ変化ニ就テ」など多数の発表がある。

骨移植は現在でも問題は解決しているとは言えないが、大正三年の第十五回日本外科学会で「興味アル骨移植術ノ実

験」と題して報告している。この中では小さくても骨の全成分を移植した方が良いことを述べている。そのほか六篇の追加論文をみる。

住田は整形外科の在り方として、関節外科学、生体力学、奇形学が基本であるべきとする、当時としては先見性のある信念をもっていた。教室の動向の中でこの三者が常に追及されているのに気がつく。

例えば、生体力学の知識は現在でも整形外科の治療の中では欠かすことができない。種々の骨切り術の基本であるし、近来目覚ましい発達をみせている人工関節手術も同様である。この点では、教室と工学部との共同研究がすでに行われているのは、信念の現われとしても、さらに先見性からみても卓越した業績である。

「伊藤久治、力学上ヨリ観タル脊柱生理的彎曲作用及脊柱各面ニ於ケル中心横軸並ニ中心縦軸ニ対スル慣性能率ノ比較研究 同上論文集、一五三—一九六」

「伊藤久治、脊柱椎間関節軟骨ト靱帯トニ於ケル相互反スル潜伏応力ニ就テ、同上論文集、一九七—二二四」

これら研究から自家の脊柱彎曲測定器を考案している。このような器具は教室付属の工作所を設け、制作にあたらせた。この工作所は戦後まで続き、多くの九大独自の装具、器械類を作製した。

骨折、腱損傷についての臨床、基礎研究もみられる。

住田の手術技術は多くの人が賞賛している。大正五年の第十五回日本外科学会の時、要望に依えて、東大医学部佐藤外科手術室で関節授動術の実際を供覧しているが、流れるような澁みのない手術手技に見学者はみな感嘆した⁽⁶⁾という。

わが国でも外科学会より分離して、整形外科学会設立の気運が生じた。東大名誉教授田代義徳を中心に話が進められて、住田にも相談があったとき彼はこの動きに反対した。外科学の歴史を回顧しても骨関節外科をもって始まり、内臓外科などはその後付随して発達した一分科である。整形外科こそ外科学会の大道を歩むべきであるとの信念を変えな

かった。後に大阪での開業時代も活躍の舞台は、外科学会であった。因に日本整形外科学会は大正十五年（一九二六）四月三日東京で田代義徳を会長として、第一回総会が開催された。準備委員会や総会のと、九大からは鈴木諒爾が幹事として参加した。⁽⁸⁾

人物像そのほか

講座創設当時から医局員であった藤木廣の回顧談⁽⁷⁾によれば、教授室にはナポレオン、ビスマルク、伊藤博文の肖像があり、彼等の不滅の業績を賞賛していたという。また、壁には恩師佐藤三吉、Kaufmann, Payrの肖像画がかけられていた。強い意志の持ち主と恩師にたいする尊敬の念が厚かったことが理解できる。

創業の困難を新入局員には話し、戒めとして「学問は登山と同じである。先ず体を頂上に向けて、足元をしつかりと固める。歩き始めたら上を見てはならぬ。疲れるからである。下も見てはならぬ。高慢になり易い。横を眺めてもならぬ。谷があつて目が回る。一步一步、歩むのみである。」と訓示した。当時の三十歳代の教授の意気込みが伺える。

田代義徳⁽⁹⁾は「九州大学の如きは馬鹿に病人が集まる所である。他に競争者が無いと同時に満州、台湾、上海とかから集まってくる。私は九州大学の方が東京大学より総ての学科において、マテリアルが多いと思う。（中略）そういう地の利を得た為もあるが、その上住田君の努力もあつて沢山の病人がきた。今後神中君がやっても病人がくる。それから整形外科と看板を掲げているのが多い。関東や東北には整形外科という看板を見ない。……」と述べている。福岡でいかに整形外科への理解がえられていたかが窺える。

井関九郎は「博士人物⁽¹⁰⁾」で住田を評して次のように述べている。「運動好にして、諸種の戸外競技、殊にボート、水泳などを好み、学生時代は其の技の選手たり。今は盆栽を業余の趣味とす。また文学に嗜み深く、淡江漁夫の号あり。賦性敦厚にして質朴の風を具え、人格陶冶の学府に欠くべからざる人格者として尊敬すべきなり」とある。

住田の第二外科時代からの教室員であった溝口喜六の三男博は、体格の大きな人で威圧感があり、子供心に大人物だと思つたと筆者に話している。

住田は明治四十年二月伊藤藤せいと結婚、男子二名、女子二名の四児をえた。福岡での住居は福岡市須崎裏町二十一番地（現中央区天神五―四―一）であつた⁽¹⁾（図7）。ここで長男正志を八歳、長女旭を四歳で、次女淳を一歳で失うという悲惨な経験をしている。

いわゆる九大特診事件について

大正十四年（一九二五）七月十八日の福岡日日新聞は第一面に大きく「九大病院に黒い手が伸ぶ」の見出しで、福岡県警が医学部前の旅館の捜査を行ったことを報道した。これがいわゆる特診事件の始まりであつた⁽¹²⁾。

発端は患者の投書による告発で、特別扱いを希望する患者とこれに応じる大学医師が存在し、かなりの金品のやりとりがあるとの内容であつた。県警は以前からこれを探知していた。患者の便宜を計るばかりか、積極的に患者を大学近辺の旅館に勧誘するものまで出現する事実をつかんだ。最初に旅館の経営者が取り調べを受け、自宅捜索も行われ拘引された。さらに国鉄駅から出る人力車の車夫までが尋問されるに至つた。連日新聞紙上はこの事件を報道し続けた。

前述のように整形外科に関しては市内の三病院が総長の許可をえて患者を収容していた。これは時に八十から百名に及ぶ患者数となり、大学から医局員、看護婦を連れての教授回診や診察道具材料を一緒に持ち出している診察行為があつたのは事実である。初期においては問題はなかつたが、年数が経過して漫然と続いたことに対して、患者側の差別意識とともに不満が爆発したものと思われる。

ヨーロッパの大学教授は大学勤務のかたわら、私的病院やベッドを持って診療するのは公式に認められていて、何ら問題はない。逆にこのことが上級医を目指す励みになっているほどである。当時、ヨーロッパ留学からの帰朝者には、

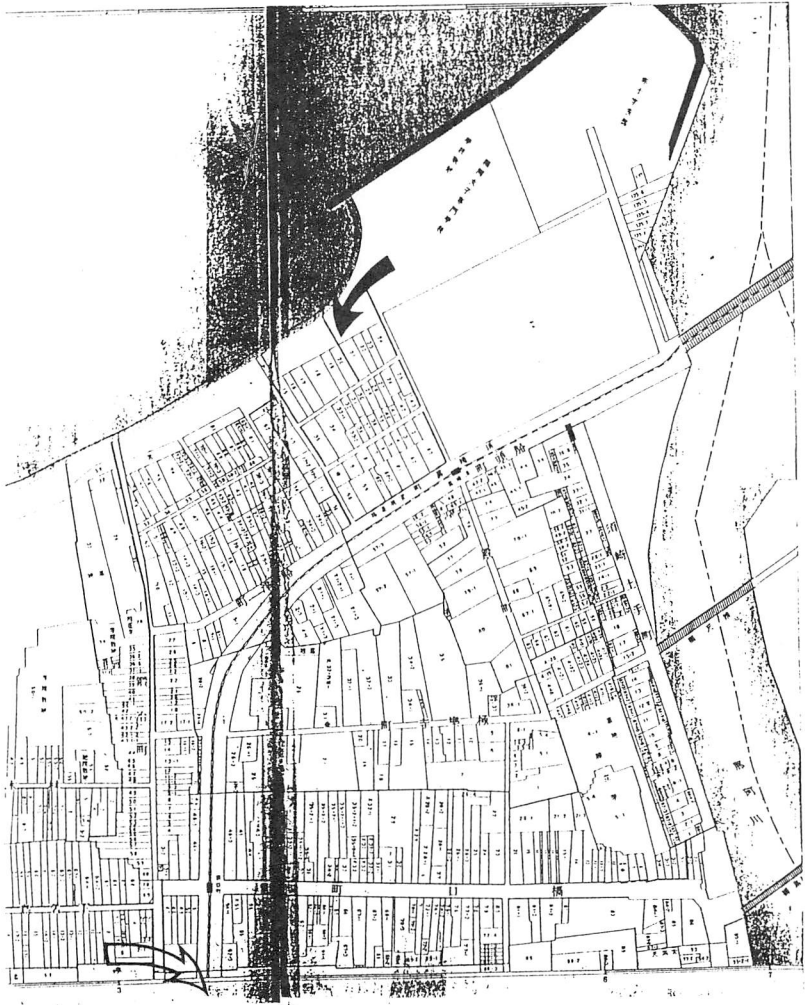


図 7(a) 福岡市における住田正雄の住所。市内須崎裏町21番地 (矢印)。
現在の中央区天神5-4-1、当時は博多湾に面していた。白抜き矢印は
現在の天神交差点。(大正15年の地図)



図7(b) 同地に当時の離れがある。現在は
九大整形外科出身故城戸正明博士邸

新興のわが国にも許されて然るべきと天衣無縫な考えがあったと推察される。

大学教授の住居および生活と庶民との間の格差が大き過ぎたことも一因であらう。⁽¹³⁾

七月二十八日遂に二千人が参加した市民大会が開催され、糾弾ののろしが拡大した。一般市民の怨嗟が如何に大きかったかがわかる。

七月三十日整形外科講師が収監され、翌日は住田自身も他の関係教授ともども直接取り調べを受けるに至った。

八月上旬司法首脳は司法相官邸に集合し、特診行為は犯罪として検挙することを決定した。これを受けて文部省も全国大学に注意を指示する慌て方であった。

文部参事官は直接九大を訪問、岡田文相も遂に関係者に辞職を勧告したのである。

八月十二日、三教授、一講師、一助手が依願免官の形で辞表を提出、受理され

た。しかし、檢察陣はこれに満足せず、新聞論調も処置に遺憾の意を掲げ、政党による論争にまで発展した。憲政会は独自の委員会を結成し、斎藤隆夫氏などは訴追すべきとの主張を述べている。これは政友会、さらには水平社も同調し、高位高官であるが故に不起訴になった不当性を追及した。しかし、文部省当局の説明は近世の刑法は目的主義であつて、目的を達成すれば刑罰は与えないとの見解をとっていた。

八月下旬までこの論争は続いたが、結局不起訴のまま終焉した。

筆者なりにこの事件を顧みると、次のような要因が重なって発生したと考える。すなわち、

- 一 医学部に常在する診療の問題、これは人間関係が絡むこと、
- 二 西欧の教授が公務とは別の個人用の診療を行っていること、

- 三 市民感情の中に羨望を含めた医師、大学教授へのわだかまり、不満があること、
- 四 九大がこれらの感情のスケープ・ゴートになされたこと、
- 五 新聞報道、市民大会などを考慮すると、底流に大正デモクラシーが存在したこと、
などである。

「このようなことは全国の医学部に多少とも存在する」という新聞論説⁽¹⁴⁾は、この辺の事情をよく物語っている。

大阪時代

辞職後の住田は幼年時代を過ごした大阪での生活を考えた。折りよく、大阪市東区北久太郎町農人橋西詰(現中央区船場中央一丁目一番と同久太郎町一番にまたがる、中央区役所前)にあった河野病院が売りにだされ、ここに「住田外科病院」を開設した(図8)。標榜はあくまでも外科であった。昭和二年二月十五日のことである。⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾

開業しても学問的情熱は衰えることはなかった。昭和十二年(一九三七)日本臨床外科学会が創設された年の発会式では(三月三十一日)、医局員の左海藤太郎、菊川勤也氏に「関節結核ニ於ケル住田博士ノ理想的切除術ニ就テ」と左海、瀬尾貫二氏に「先天性股関節脱臼治療ニ関スル知見補遺」を提出させ、十一月の設立総会では住田自身が特別講演として九大の十四年間、大阪での十二年間の合計二十六年にわたる経験から次の演説をして、聴衆に感銘を与えた。

「骨及び関節ノ結核ニ就テ、日臨外誌、第一巻、第二号、一〇九—一三七、昭和十二年」

雑誌の編集後記には、「住田博士往年ノ元氣少シモ失セズ。才弟子達モ先生ヲ守ツテ殆ト演壇ニ立タザル者無キ有様。外ノ見ル目モ羨マシ」とある。

このときには、「脊椎彎曲変化ノ軀幹其他ノ外形ニ及ボス影響」、「興味アル腹壁外傷ノ一治験例」(左海藤太共演)、「幼年期ニ於ケルO字脚ノ治療ニ就テ(長井忠、菊川勤也)」も同時に発表された。

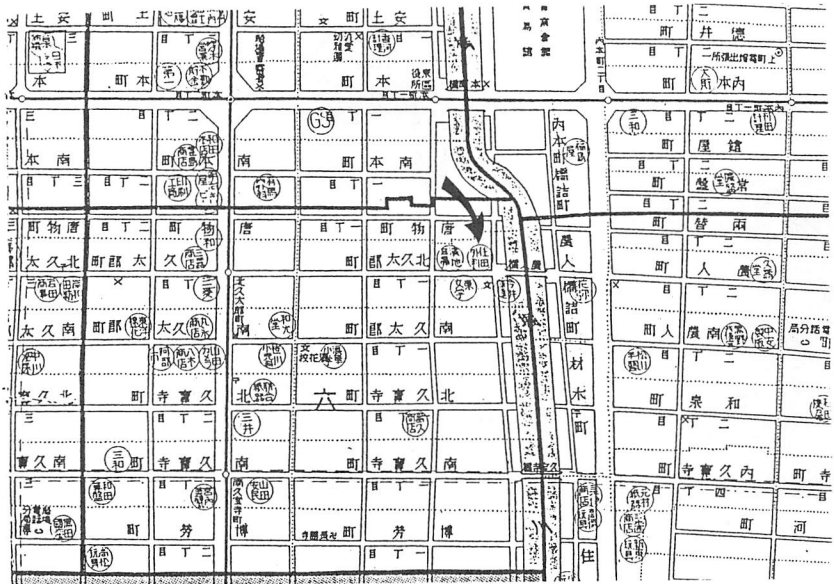


図8(a) 大阪市における住田外科病院の位置(矢印)昭和11年。当時の東区北久太郎町農人橋西詰(現在の中央区船場中央1丁目1番と同久太郎町1番にまたがる)。(長門谷洋治氏提供)

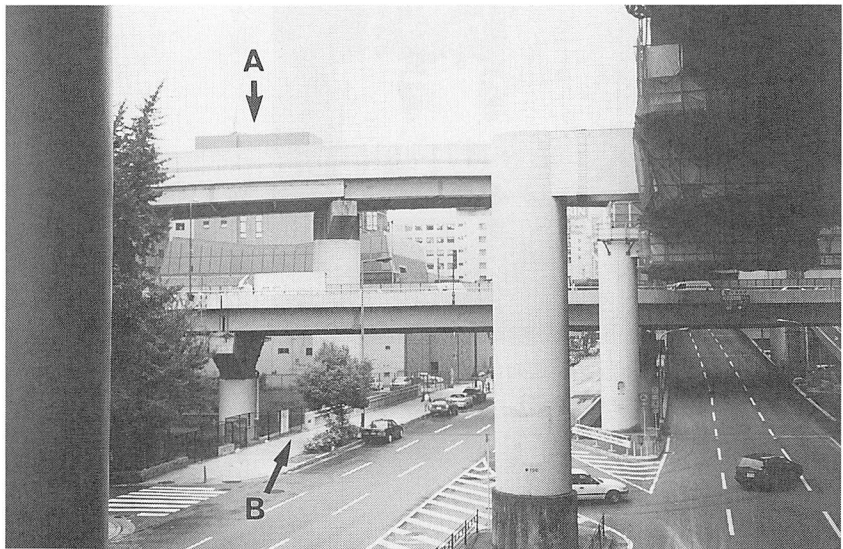


図8(b) 現在は高速道路の下で、中央区役所(矢印A)の前に当たる。矢印Bが農人橋南



図9(a) 昭和10年頃の住田外科病院(長門谷洋治氏、大阪府立中之島図書館提供)



図9(b) 住田外科病院職員(昭和10年12月)、前列中央が住田正雄(左海伸夫氏提供)

しかし、日本整形外科学会への参加、登場はついになかった。当時を知る人の話では住田外科病院は門前市をなし、住田の技は賞賛的であったと異口同音に語っている(図9)。しかし、このような第二の人生にも大きな不幸が待ち受けていた。妻せいが昭和十九年三月十六日病死し、その一年後ただ一人残された次男正樹が昭和二十年三月二十日フィリッピン、ルソン島において戦死した。これで住田正雄直系の人々は絶えた。

これに追いうちをかけたのは、昭和二十年六月一日⁽¹⁷⁾の大阪大空襲により、病院は灰燼に帰した⁽¹⁸⁾ことである。



図10 住田正雄夫妻の墓、右は長男正樹氏、左は次兄正直氏の墓。(法華寺内)

住田外科病院の位置は現在の大阪市中央区役所前に当たるが、農人橋だけが形を変えて残るだけで、昭和四十年の都市計画で高速道路が走り、往時を偲ぶものは何一つない。

戦災後、住田は京都市上京区出雲路俵町二十四番地に隠棲し、昭和二十一年一月二十一日亡くなった。享年六十八歳であった。最後を看取ったのは、九大、住田外科病院以来身辺の世話をしていた生田ナヲであった。約半年間の京都における生活、死因などについては現時点では情報がえられていない。

墓は故郷の法華寺にあり(図10)、平成七年の阪神淡路大震災で被害を被ったが、今は昔のままの姿に修復されている。戒名は顕徳院殿玄道正雄大居士で、墓碑銘¹⁹⁾は京都大学文学部鈴木虎雄教授の撰になり、谷内清巖大僧正の筆による。

おわりに

わが国における近代整形外科の開拓者の一人で、九州大学医学部整形外科の初代教授であった、住田正雄(一八七八—一九四六)の生涯を辿ると、それ自体が一つのドラマである。一人の英才が新しい学問を推進し栄光の路を登り詰め、人生でも油の乗り切った絶頂期に失墜し、最後は孤独の中で去った姿は、今回の調査の間、親しげなしかも憂愁に包まれた表情で筆者の傍に常にあった。

最後に故住田正雄先生の靈にこの小篇を捧げるとともに、次に記す方々にご教示、資料の提供を頂き深甚の謝意を申し上げます。

淡路島では柏木大治、住田良夫、法華寺住職山本泰三、吉田忍の各氏に直接ご案

内、ご教示を頂戴した。長門谷洋治、蒲原宏両氏には大阪時代に関して、多くのご教示および資料の提供を受けた。

また、天児和暢、池野寛、古西義鷹、左海伸夫、鈴木勝巳、問田直幹、福元敬二郎、別所四郎、三浦裕正、溝口博、森永亨、山室隆夫の各氏（五十音順）、および九大医学部整形外科、西日本新聞社、福岡県立図書館、大阪府立中之島図書館には多数の貴重な資料の提供を受けた。

文献および注

- (1) 司馬遼太郎著「播磨灘物語」、吉川英治著「黒田如水」などに詳細な記述がある。
- (2) 石井邦一「手野の医者どん—三木家の人々」岡垣歴史文化研究会年報、第六号、昭和五十八年十月
- (3) 九州帝国大学医学部二十五年度史、昭和三年
- (4) 後に一時関節成形術と呼ばれたこともあるが、現在の日本整形外科学会用語では関節形成術 (arthroplasty)
- (5) 天児民和「住田正雄教授」臨整外、二十七巻、七〇四—七〇六、平成四年
- (6) 官制改正により明治四十四年四月より九州帝国大学医科大学となる。
- (7) 藤木廣「九大整形外科教室開講二十五周年に際して教室創立時代を回顧す」開講二十五年集、昭和十二年四月
- (8) 日本整形外科学会雑誌、第一巻、一八二、大正十五年
- (9) 田代義徳「日本の整形外科に関する追想談」(医学談話会における講演、昭和五年五月二十九日)、東西医学大観、続編第十三巻、三十七号、一七五—ページ、昭和五年
- (10) 井関九郎「批判研究、博士人物、医科編」、三二四、発展出版部、大正十四年五月
- (11) この場所には住田家の離れが、今も戦災を免れて現存している。九大整形外科同門の故城戸正明博士の持ち家となっているのも、奇しき縁である。
- (12) 福岡日日新聞、大正十四年七月十八日より同年八月二十七日分
- (13) 三宅速「或る明治外科医のメモランダム」三宅進編、日本文教出版株式会社(岡山)、平成十年二月
- (14) 福岡日日新聞、大正十三年八月一日、四日、五日、八日、二十七日

(15) 日本医事新報、二三八号、五一四、昭和二年二月

(16) 長門谷洋治「大正・昭和(戦前)時代、船場の医師たち」、「船場の医者」所収、大阪市東区医師会、昭和五十七年七月

(17) 近代大阪年表、一五九、日本放送出版協会、昭和五十八年十月

(18) 大阪市戦災焼失区域図(復刻版)、大阪大空襲を語る会編、日地出版株式会社、昭和六十年六月

(19) 住田正雄墓碑銘

君諱正雄住田氏淡路津名郡江井町人金作君第四子幼穎悟
長入東京帝国大学医科明治廿六年卒業從佐藤三吉教授專
攻外科後任福岡医科大学助教授出為文部省留学生遊学独
逸大正元年歸朝任九州帝国大学教授開設整形外科学講座
授医学博士推為日本外科学会長昭和元年辞官叙正五位賜
勳三等明季任大阪創立外科住田病院大戰酣遭爆災退棲京
都優遊自適二一年一月二一日病卒年六十九君於外科最長
整形創始專門其功偉矣治病之技巧卓絕關節結核等症無
与相此患者爭趨履接于門暇則柔道水泳盆栽書画著作並有
好尚亦不敢追人後天才者乎頃者君家介人致狀求銘乃銘曰

誰無肢体 或正或否 形整用全 由于吾手

創始之功 仰推泰斗 青山有墳 令名不朽

正二位勳二等 文学博士 鈴木虎雄撰

前真言宗長者大僧正 谷内清巖書 印

(福岡市・福岡整形外科病院)

The Life of Dr. Masao Sumita (1878–1946), A Founder of Modern Orthopaedic Surgery in Kyushu

by Akira KOBAYASHI

The life of Dr. Masao Sumita, who was the first professor of the Department of Orthopaedic Surgery at Kyushu University in Fukuoka during 1912–1925, was one of the founders of modern orthopaedic surgery in Japan. His technique of operative procedures had gained a national reputation, and the successful results of his operations of arthroplasty on over 300 joints, along with his other enormous academic achievements were reported.

However, he was accused of conducting private clinic activities outside the university hospital, which was considered illegal as a national public official. The free attitude to medical practice that he had experienced during his stay in European countries, where conducting private clinic work, even outside the national university was approved, led to this unjustifiable incident in Japan. He was subsequently purged from the university due to this accusation.

In his family life he was survived by his wife and four children. His life story seemed to the author to be a drama with rise and fall.

Consequently, the author would like to reveal Sumita's outstanding academic achievements and real personal image as an ingenious surgeon and scholar, in spite of the sorrowful aspect of his life.